



左上と右下、ニクラス以下、クラブの主要関係者がゴルフ場を視察する様子。ニクラス自ら試打する場面もあった。運営組織であるクラシックグループとニクラスの交流は、25年前の(北海道クラシックゴルフクラブ)設計に端を発する。来年、同コースで日本プロゴルフ選手権が開催予定。



上/初夏の朝、造成中の(東京クラシッククラブ)ゴルフコースを視察するニクラス。18ホール、全長7,220ヤード、パー72のコースは、設計者本人曰く、選ぶティーで難易度にかんがりの差を設け、レベルに応じてチャレンジが楽しめること。左/ウォーターハザードが美しいコース風景。

## TOKYO CLASSIC CLUB

本年初夏、ある日の午後、ジャック・ニクラスは東京都心の会員制クラブに佇んでいた。この日、早朝から視察した千葉市和泉町のゴルフ場は、来年6月の開場を目指し、順調に開発が進んでいた。ただし、ニクラスは今回、単にゴルフ場を設計するだけでプロジェクトに参加したわけではなかった。豊かな人間形成の場を目的とする、本邦初の本格的カントリークラブの名譽発起人として、ゴルフ界の帝王は(東京クラシッククラブ)の誕生に賛同していた。

戦後、日本のゴルフ事情はバブル経済期を頂点に急発展した。そして21世紀、わが国は成熟社会を迎え、ゴルフを含むライフスタイルが大きく変化す。モノから心の豊かさが求められ、自然や環境との共生は不可欠となる。2020年には二度目の東京五輪が開催、東京が真の国際都市となるには、次へと続くソサエティの形成がまざまま問われている。

こうして、世界基準による真のカントリークラブ創設を目標に、(東京クラシッククラブ)は構想された。欧米型の本格的カントリークラブの在り方について、ニクラスは語る。「世界的な見地では、カントリークラブとはファミリー全員が豊かなオフタイムを過ごせる場です。美しい自然の中、みんなでスポーツやハイキング、あるいは食事が楽しめる。一番大切なのは、老若男女の別なくメンバー同士が絆を深められること。

そのひとりの施設がゴルフ場です」米ツアー通算73勝、4大メジャー18勝を成し遂げたニクラス。大学時代にはランドスケープ工学を学び、やがてメジャーで勝ち続けながら現代最高のゴルフ場設計者としても名を馳せてきた。設計哲学の根幹にあるのは、美しくあること、そして戦略性に富むこと。

「このコースは天然の水の流れがあり、適度な高低差を備え、緑に溢れています。理想的な地形であり、私以上にこの土地を活かしたゴルフ場をつくれる者はいないと思います」

一方、ゴルフ場に沿う広大な敷地は、馬主クラブの乗馬ゾーンだ。そもそも同地は江戸時代から放牧場であったとも聞け、(東京クラシッククラブ)では引退した競走馬を受け入れ、メンバーは新たに馬主となってアニマル・ウェルフェアの概念の下、動物に癒やされる休日過ごせる。そして馬飼育による堆肥は、隣接する有機栽培農園の土に活かされ、メンバーにクラインガルテンの体験を提供する。家族で収穫した野菜をクラブハウスのレストランで調理するプランも企画、さらにはサマーキャンプや陶芸教室、生物観察など、幅広いアクティビティも準備中だ。

「私の言葉が、印象に残る。ニクラスの言葉が、東京クラシッククラブに継承されることを願う」

未来のために今築くべき価値。理想のクラブライフが来春、幕開ける。

《東京クラシッククラブ》 ■所在地 千葉県千葉市若葉区和泉町237-3 ■開業時期 2016年6月予定 ■同クラブは株式発行およびクラブメンバーの会費により運営。開場後に、クラブソサエティ組織の一般社団法人化を検討中。募集に関する詳しいお問い合わせは、東京クラシッククラブ事務局 ☎03-6804-1606 <http://tokyo-classic.jp>



ゴルフ場に隣接した乗馬コースでホースバックトレッキングができる他、併設された教育の森では、子供たちのための生物観察などを準備。さらには有機農業によるクラインガルテンも体験できる。(写真はイメージ)



乗馬クラブ  
クラインガルテン  
教育の森  
放牧地(乗馬スペース)  
ゴルフコース



先頃、来日したジャック・ニクラス。メジャー歴代1位の18勝を達成。一方では設計者として世界中のゴルフ場をデザイン。2014年には、米国「ゴルフマガジン」誌「アーキテクト・オブ・ザ・イヤー」を受賞。



## 帝王ジャック・ニクラスが創る日本最後の理想郷、〈東京クラシッククラブ〉、来春OPEN。

東京が真の国際都市となるためには、世界水準の成熟したソサエティ文化が必須といわれる。この価値観の下、字義本来のカントリークラブ〈東京クラシッククラブ〉が、来春誕生する。ゴルフ場の設計者は、ジャック・ニクラス。乗馬場や野菜農園なども併設されるプランだ。折しもゴルフ界の「帝王」が視察に来日。クラブライフの在り方、構想について話を聞いた。

Photo by Shigeru Kanisai(Above)